

まえがき

千葉県教育庁学校教育部教育計画課長

和久正史

外国人子女教育の指導実践事例集

平成 7 年 3 月

千葉県教育庁学校教育部教育計画課

近年、国際化の進展に伴い我が国における外国人就業者が増加し、それに伴って公立学校へ外国人児童生徒が入学あるいは編入するケースが増えている。

このことは本県でも例外ではなく、例えば日本語指導が必要な外国人児童生徒は、平成4年度の調査では県内の小・中学校に336人が在籍していたが、平成6年度は429人（千葉市を含む）と、大幅な増加傾向を示している。

外国人児童生徒にとって日本の学校は母国の学校と生活習慣等が大きく異なり、しかも、子供達の多くが（両親も含めて）ほとんど日本語がわからないため、受入れた学校では、特に入学あるいは編入学の初期の段階における適応指導等に大変困難を感じているのが現実である。

しかし、ますます進展する国際化の中で、日本の学校に入学あるいは編入学を望む児童生徒の増加は避けられない現実である。各学校においては、国際理解教育の一環として、むしろ、この問題に積極的に取り組むことが望まれる。

このような状況を踏まえて、千葉県教育委員会では外国人児童生徒の受入れに当たった事務手続きと日本の学校生活への円滑な適応を促進するための指導資料を平成4年度より作成している。

今年度は、日本語指導、適応指導等日頃の教育実践による事例により、各学校における外国人児童生徒の個人差に応じた具体的な指導の指針となる指導実践事例集を作成した。

各学校においては、本指導資料を十分活用していただきたい。

なお、本指導資料は、巻末に示した先生方の御協力を得て作成した。

改めて厚く御礼を申し上げたい。

目 次

まえがき

I 小学校の指導実践の事例

- 事例1 カルチャーショックの克服（アメリカの兄弟）..... 1
- 事例2 同じ学級を望んだ姉とその弟..... 6
- 事例3 日常の日本語は理解できるがクラスでの授業について..... 11
いけない児童の学習指導の例
- 事例4 遊びや体験を中心にした適応指導..... 16
- 事例5 広東語を話すYちゃんが日本語でも話すようになった..... 21

II 中学校の指導実践の事例

- 事例6 GUSTO KO ANG JAPAN（日本 大好き）..... 26
—— 異文化理解の実践を通して ——
- 事例7 我意然心愛（僕の宝物）..... 31
—— 作文指導を通して ——
- 事例8 U子の選択..... 36
—— 学校生活上の問題点と保護者との関係 ——
- II 平成6年度外国人子女教育指導資料作成委員会委員..... 41

I 小学校の指導実践の事例

事例1 カルチャーショックの克服（アメリカの兄弟）

1 プロフィール

1990年2月 家族でアメリカから来日（父親・母親・兄弟の4人）

4月に兄は2年生として編入、弟は新1年生として入学してきた。（アメリカでは兄は3年生、弟は1年生であったが、日本語及び生活適応から考え、兄を2年生、弟を1年生とした。）

この家庭は、父親がアメリカで日本企業に勤め、転勤で日本に来た。すでに5年滞在、後3年（兄が中学3年、弟が中学2年まで）日本に滞在することになっている。

来日当初は家族全員が日本語を話すことができず、編入手続きは通訳を伴って行った。編入当日、校長室で兄は椅子に座らず絶えず周りに気を取られて動き出すのに対し、弟は、はにかんでじっと座ったままだった。編入当初は朝母親と共に登校し、弟が下校する時、母親が迎えに来る毎日が続いた。

2 経 過

来日初年度の1学期は、週6時間兄弟同じ時間帯に通級時間を設定した。2・3学期は週5時間とし、内1時間だけは、兄弟が違う時間に勉強するようにした。3年目からは週1時間の通級時間で学習を行っている。

以下、兄弟を2か月、3か月、6か月、9か月と月を追うごとの変化を書いて見る。

2か月

二人とも、意欲を全く示さぬ日や、積極的に参加する日があり、気持ちにムラが多い。習慣の違いのため（人前では衣服は脱がない）体操服に着替えず、体育に参加しない。清掃は嫌いだが、お手伝いは好んでする。兄は教室にじっとしていることが苦痛で勝手に教室をはなれて遊んでいる。好き嫌いがはっきりしておもしろくない授業は我慢しない。二人とも担任が大変であるが、茶目っけがあり、友人にも、上級生にも可愛がられる。慣れて来たのでいたずらもするようになった。

3か月

弟は担任によく質問するようになった。給食の日本のおかずが珍しくて「これなんですか」とよく尋ねる。弟の方が集中力もあり、授業のほうも我慢して参加する。兄は1時間の授業に集中できない。一人で図書室に行ったり給食室に行ったり自由に行動している。二人ともひらがなのたどりが読めるようになり、語彙が増えた。ゆっくり話すとかわかって簡単なお使いができるようになった。学級で兄は友達とふざけあったり、コミュニケーションを取れるようになったが、まじめでおとなし

い弟はさそわれても遊ぼうとしない。

6か月

日常の会話がかなり話せるようになってきた。「昨日の事」について聞くと「〇〇へ行きました。」
「〇〇と行きました。」と答えられるようになった。嫌がっていた本読みも上手に読み、「～したこ
と」を短文で書くようになった。二人とも表情が明るくなり、友達と校庭で遊ぶ姿が見られるよう
になった。学校にやっと適応してきたと思われる。

9か月

物覚えの早い弟が先に日本語が上手になったが、この頃では友達とよく遊ぶ兄も上達して来た。兄
のほうが積極的で友達が多いが、弟はすべて消極的で好きな友達は一人だけと言う。弟に「どうして
ぼく日本語が上手になったかわかる？友達がたくさんいて大勢の日本人と話したからだよ。」と兄が
説明する。

◇体操服に着替える

アメリカからきた兄弟は、体育の時間に教室で体操服に着替える事を知らなかった。アメリカでは
着替えないでスポーツをやっていた。そのために起こった一種の文化摩擦である。

弟の連絡ノートより

5月8日	体操ズボンには着替えるのを嫌がります。つきっきりではいられないので今週の合同 体育は、ズボンのままでやりました。
5月12日	きのう体育が始まる前にお母さんがきて着替えさせてくれました。洋服が汚れている ので様子を見にきたようです。確におもしろい子ですが嫌だとなるとがんと動か ないところがあります。だいがぶ学校生活にも慣れ、日本語も生活上やらなければなら ないこともずいぶん理解してきたようです。
10月22日	今日も合同体育がありましたが、やはり着替えず、ドッジボールにも入りませんでした。
12月5日	嫌がっていた体操服に着替えることも、上だけですができるようになりました。嬉し いです。(少し着替えが恥ずかしいようです。)

(兄)の話

「僕は体操服の着替えはすぐできたよ。しかし最初のうちは人が少しでも少なくなったときを見計
らって着替えたんだ。だって恥ずかしかったから。」

◇給食を食べる

アメリカの学校は給食制度というものがなく、その学校では自分でお弁当を持って行くか、カフェ
テリアのメニューを見て気に入ったのがあったら注文するシステムを取っていたらしい。また、彼
等は魚を食べず、特に弟は魚が今でも食べられず、給食で困った例である。

(兄)の話

「日本に来てしばらくして給食はオレンジが出たんだ。アメリカにいるときはオレンジが出る道
具を使って厚いオレンジの皮をむいていたんだ。日本では道具がなかったため友達にむいてもらおう
としたんだ。しかしまだ日本語が通じなかったので指でオレンジをさし、むいてくれるように頼んだが、
何を思ったのかその友達は僕がオレンジが嫌いだから食べていいと思い、オレンジを指でむいて自分
で食べてしまったんだ。その時、やはり日本語を覚えないと駄目だと思ったよ。」

弟の連絡ノートより

6月25日	給食に出た「しゅうまい」に興味を持ち、「これはなんですか。」と聞きにきた。時 間はおかかったが「しゅうまい」は全部食べました。
11月5日	今日は給食で「みりん干し」がでたので、最初教室に入りませんでした。牛乳だけで もと教室に入れましたが何も口にせず、同じ班の子が魚を全部食べ終わった頃やっと鼻を 押さえなくなりました。
11月6日	隣の席の子が何かと心配してくれます。彼の家を覚えたと行って遊びに行くと話して いました。「魚が臭いから」といって彼が食べないのを先に食べてあげています。

(弟)の話

「給食の時友達に助けられたことは本当に嬉しかった。ちょうど班替えがあり、良く知ったばかり
の友達の班になったので、僕が魚を食べられない事を良く知っていて、皆で先に食べてくれたので、
本当に嬉しかった。」

- ・弟は5年生になっても「魚」が嫌いで、林間学校で『マス釣り』をやった時も自分はやらず、塩焼き
のマスも食べないで、友達にあげてしまった。
- ・今でも給食で日本食（御飯・味噌汁・和え物）がでると一切弟は口にしないようである。
- ・兄に言わせると弟はアメリカにいたときから嫌な事は一切しなかったようだ。食べ物でも見ただけで
自分が嫌だと思ったら絶対口にできなかったそうだ。家族が少し食べてみたらと勧めても食べなかつた
らしい。兄は自分で食べて確かめてから食べたそうだ。だからアメリカでは海に住むものは一切食べ
なかったものが、今ではだいが食べられるようになったようである。

◇いじめにあう

来日当初、外見の髪の毛の色や肌の色が違うことから、通学路が同じ違う学校の児童からいじめを
受けた。学校内でもいじめを受けたが、それを克服していった例である。

日本に来たばかりの頃、違う学校の子供達から「外人・外人」とか「金髪」とよばれたり、近付いて
来てじろじろ見たりされるのがとても嫌だったそうだ。その時同じマンションに住む高校生が学校の近

くまで一緒についてきてくれたそうだ。その後通学路を変えたため彼等には会えなくなったという。また学校でもいろいろいじめられたそうだ。学校で、外国人に中指を立てると怒るといのが伝わり、高学年の児童が中指を立てて彼等をからかったらしい。怒る兄弟をおもしろがっているところがあったようだ。

(弟)の話より

「3、4年生の時クラスにいじめっこがいたんだ。「金髪」「外人は消えろ」などと悪口をいつもいわれたんだ。でもぼくは逃げるしか手はなかったんだ。なるべくいじめっこに顔を合わせないようにしていたんだ。4年生の夏休みには校庭で水風船の集中攻撃を受けたんだ。5年になりクラスがかわり少しほっとしたんだ。いじめにも会わなくなったよ。」

◇母親の努力が子どもたちを変える

来日当時、母親は日本の生活になじめず、体重が非常に減ったと聞いている。帰国子女教室が主催している「集い」や「英語保持教室」でも、当初は以前から在籍している英語圏の親の助手的存在で参加していた（日本語がまだ理解できていなかったため）。しかし、その人が帰国して以来、自分を中心となり活躍する事が苦痛であったのかもしれない。また、人前が出る事や話すことがそれ程得意でない性格のため、慣れるのに時間がかかったのかもしれない。最近はずっと明るくなり体重も増え、学校行事や地域の活動に積極的に参加している。夏休みの地域のお祭りにも参加し、かき氷売りを家族全員で手伝ってくれた。親の変化（日本の生活や学校生活に慣れた事）が、子どもたちが慣れる大きな原因になっている。そのためには学校や地域が彼等を理解し、受け入れる事が大切である。コミュニケーションを多く取り、何時でも困った時には相談を受ける体制を作ったり、こちらからお願いをする体制を作ることである。母親は日本の入学式を知らず、普段着で来て他の保護者が着飾ってきたのを見て驚いたそう。そこで本年度兄の卒業式に臨むにあたり、卒業式の様子を知りたいということで昨年度卒業式に参加させてほしいと要望してきた。

カルチャーショックの克服には子どもたちだけが克服をするのではなく、家族全員が日本を好きになることも一つの方法である。地域の人々や保護者、学校の暖かい理解と援助が慣れるもとになる。

◇兄弟の現在の問題

彼等兄弟は夏休みと冬休みには必ず帰国をしている。アメリカに着いて2日目は英語に不自由なく話しをすることができるという。現在心配していることは、アメリカに帰国したとき、逆カルチャーショックを受けないかと言う事である。両親の心配も本格的に英語の学習をしていないことである。家庭での会話が日本語中心のため、最近になり日曜日を『英語の日』とし、会話を英語だけでやっているそうである。英語の学習をしないまま日本にきてしまった兄弟。見るもの聞くものすべて日本語の世界の中で、母語を大切にしていくことは彼等に限らず、とても大変な事だと思ふ。

兄の今の悩みは『英語の日』だそうだ。日本語に慣れているため、日本語ではすぐわかる英語ではなかなか見つからない言葉、例えば『ねぐせ』などがあり、面倒だといっていた。また英語は話す事は出来るが、書く事と読む事ができない。英語は中学になったら一生懸命に勉強するつもりである。

現在は回りの友達が自分たちの事を理解しているからいじめにあわなくなったが、中学校へ入学し、知らない友達と一緒になったとき、いじめられないか心配をしている。

3 成果

- この学校では、帰国子女専任と担当児童の教師との間で、児童の学習内容及び児童の活動の様子をノートに書き、それを交換し、相互理解に役立っている。もちろんこの兄弟の5年間の歩みもファイルに残されていて変容が手にとるようにわかる。
- 学校の研究課題も学校で1本化しており、学校全体で取り組む体制が整っている。10年以上前から外国人子女が在籍しており、その一人一人のファイルが管理されていて、担当が変わっても指導方法が受け継がれている良さがある。それは多くの事例の積み重ねの成果であろう。
- 一方、帰国子女教室には「海外生活経験者親の会」の組織があり、お互いの情報交換や悩みを解決する場として活用されている。これは専任の教室が保護者に解放され、相談したり、気楽に話をしたりすることができる環境にあるためと思われる。
- 児童の間にも組織があり、以前はその児童だけを対象として放課後行われていた異文化理解教室は、現在全校児童が参加する授業の一環となっている。

4 課題

- 長期化、多様化、広域化する外国人子女の受入れ態勢の充実と適切な指導の在り方を探る。
- 編入してくる外国人子女の育って来た生活・教育環境を理解し、児童に適した教育を進める。そのためには外国人子女の個人ファイルの充実が必要である。児童一人一人は滞り国、就学状況等により学習進度が異なるため、それに対応した指導が必要である。しかし、何等かの共通性があるはずである。大まかなパターンの指導計画を作成し、今後の指導指針としたい。
- 専任教師の日本語指導方法の向上が必要である。今までは普通教室で国語の指導をしてきたが、日本語指導となると全く別物であり、指導技術だけでなく、日本語に対する理解、日本文化や世界に対する知識が必要とされる。

事例2 同じ学級を望んだ姉とその弟

1 プロフィール

2年生で学ぶ姉は9歳。本来ならば3年生である。ブラジルでの就学年齢に達した年にあたる1993年来日した。同年、新1年生として入学した弟が2年生に進級した現在、姉弟は、同学年ということになる。2人とも、ブラジルではポルトガル語による学校教育を受けてはいない。

両親と来日時6年生に編入学した兄を含めて家族は5人である。日系人の母親は1年早く来日し、家族を日本に呼び寄せるために準備をしていた。その間、ブラジルでの姉は、母親のいない家庭の中で家事を手伝っていた。来日当初、子供達は日本語がまったく分からない状態であった。しかし、外国人だからと特別に親切にされることなく、世の中の厳しさを克服していく子供達に育てほしいと前向きに考えている母親の様子からは、子供達に対する日本の教育への期待の強さが伺えた。

そこで、4月当初は、それぞれの子供の年齢にあたる学年に編入学した。日本語がまったくわからず戸惑いの様子を見せていた兄や弟は、それでも周りの子供達の関心の高さによって友達と触れ合うことが多く見られ、数日のうちに学級の中に打ち解けていった。それに比べて2年生での姉は、とてもおとなしかった。約2週間後、母親が来校し、姉の日本語及び生活面での不応により、弟と同じ1年生で学ばせたいという申し出があった。

2 姉弟の編入学当初の様子

入学式当日、教室で配られた学習道具を前に、何をしたらよいのかわからず泣いてしまう姿が見られた弟であった。しかし、翌日から周りの様子を見ながら自分で行動するとともにポルトガル語を教えたり、日本語を教わったりしながら、友達と自然に打ち解けていった。

姉が入った2年生の学級には、ブラジル出身の女子がいた。言葉の面や同じ国の出身ということで気持ちの面で安心感が持てるだろうと考えたためであった。母国語での会話が自然にできることを期待し座席を近くにさせたため、時々ポルトガル語で会話している姿が見られるが、普段はとてもおとなしく、友達に誘われると一緒に遊ぶ程度であった。また、学習時においては、日本語の五十音をしたり、ノートに文字や数字の読み書きの練習をしたりしていた。姉の学校での生活はもとより、日本での生活に十分慣れることができない様子が見られるまま約2週間経ったある日、母親が来校した。

3 姉の不応の状況

来校した母親の話による姉の不応の状況は、「日本語がわからなくて困っている。」「2年生の中で自分だけ違う学習をすることを嫌がっている。」「弟と同じ学級なら行けけれど、そうでなければ学校へ行きたくないと言っている。」ということであり、学校でおとなしく見えたのは内気な性格に加え、不応がそうさせていたものであり、本来は勝ち気な面も持ち合わせていることを知ることができた。さらに、母親の「弟と同じ学級で日本語を初めから学習させて欲しい。」という申し出があった。

このようなことから、担任は校長に連絡。その後、校長から市教育委員会の担当者に相談し承諾を得たうえで、姉の編入学をすぐに1年生の弟の学級へ変更した。ただし、兄や弟は、編入学当初のままであり、姉が元の学年に戻りたいということも考えられるので、籍はそのまま2年生にしておくことにした。

4 姉が日常会話(日本語)を話すまで

姉を迎え入れる

4月19日、姉は自ら望んだ1年生の弟の学級へ移った。姉を迎え入れた時、学級の女子は歓声をあげて喜び、弟は嬉しさが隠し切れないといった表情であった。姉は、未だ緊張しているようで、周りの女子がノートを出してあげたり、黒板に貼ってあった「ツクエ」「ボウシ」「ランドセル」等のカードを用いながら世話をするのに静かに従うだけであった。

姉らしき態度

健康観察では姉弟ともに「はい、元気です。」と、はっきりした声で返事をする事ができた。しかし、何かわからないことがあったり、困ったりしたときには、涙ぐんで隣に座る弟に助けを求める視線を投げかける姿が目立つ姉であった。ところが、数日後、弟が調子に乗り過ぎて友達をたたいているのを見ると、さっとその場に行って注意をしたり、担任が弟に指導していると日本語は理解できていないにもかかわらず、その気配から弟を諭したりする姉らしい態度が見られるようになった。

一人では学校へ行きたくない

同じ学級のある男子が、幸いにも同じアパートに住んでいるということもあって、毎朝、姉弟と一緒に登校していた。4月28日も、その男子がいつも通りに家を訪ねると、弟は風邪のために学校を休むということであった。姉は、元気であったものの「一人では学校へ行きたくない。」ということらしく、二人とも欠席した。30日の朝、弟はすっかり元気を取り戻した様子であったが、姉は自分の座席でしくしく泣いていた。心配になって様子を伺うとどうやら本当に風邪をひいてしまったらしい気配であった。

この日以来、弟が学校を休むことになると、姉もきまって休むことが続いている。

座席を離す

限られた数人の女子とではあるものの休み時間を一緒に過ごすなど、少しずつ友達と打ち解け始めた様子が見られるようになった姉だが、学習中には隣の席の弟と二人だけの世界といった雰囲気を作り上げてしまっていた。そこで、事態を打開すべく担任は、姉の座席を前の女子と交換した。弟と同じ学級になってから、ちょうど1カ月経った5月19日のことであった。

座席換え直後、隣の女子に活発に話しかけ楽しそうに過ごしている弟とは逆に、姉は机の上に顔を乗せ、全身をだらりとしてつまらなそうにしていた。休み時間に、弟が算数セットの“すごろく遊び”をしていると姉が近寄って行き、それを見ていた。

日常会話で日本語を話す

6月24日の校外学習で、いっなくなると楽しそうに友達と水遊びをしていた姉は、近くにいた担任にも水をかけて喜んだ。今までに見られなかった積極的な行動に姉の心が少しずつ開かれていく予感がした。そして、翌日、学級の子供達が喜びの表情で担任を囲んで叫んだ。「〇〇ちゃんが、しゃべれるように

会話ができる。引っ込み思案でなかなか思い切ったことができない姉にとって、安心していられる場となり、登校することが苦痛でなくなったと思われる。2年生になった現在では、多少、体調がすぐれなくても、また、遅れてでも登校して来る。学級の友達を手伝ったり、面倒を見たりすることもできるようになった。

学習意欲の向上

友達と違う学習をしていることに対する姉のひげめが少なくなり、同じことをしているという安心感や一つ一つわかっていく楽しみがあったと思われ、学習意欲が湧いてきたと考えられる。取り出し指導の際には、理解は早いですが気が散りやすい弟に対して名指しで注意をしたり、自分は慎重に取り組んで弟の間違いを指摘して直させようとしたりする姿が見られた。

日常会話の上達

姉弟の編入学後、約5カ月目にあたる1年生の2学期になると、日常会話がかなり上達してきた。2年生になった現在では、二人も日常会話にはほとんど不自由しない。1年生の時に行った教務主任や言語文化ボランティアの方による取り出し指導、学級での基礎的な国語科学習が効果的であったと考えられる。

8 課題

存在感の逆転現象傾向

学習に関しては、弟の方が理解が早い。漢字の習得率、作文力、運動能力テストの通過率等、そのほとんどで弟の方が良い結果が見られる。両親も、これまで姉としてとても頼りがいのある存在だった姉が学習面に関しては、弟にかなわないと感じて劣等感を持たなければ良いかと心配している。

今後の学級編成

姉弟そろって同じ学級にいと、お互いに頼り過ぎる部分も見えてくる。日本語での会話がほぼ自由にできるようになった今、進級するにあたり学級編成をどうするのが望ましいのか、さらに、姉の在籍は編入学以来そのままであるため、学習指導要録や出席簿等は一上上の学年でつけている。中学校に進学するにあたっては不都合が生ずることになるので検討する必要がある。いずれも、両親や本人の気持ちを大事にする上で、相談しながら決定したい。

体制の整備

言語文化ボランティアの方との子供達や教師の関わり方をどのようにすればよいのか、すなわち、指導内容の体系化を図ったり、常に関わることができる教師を確保したりする必要がある。また、母国語保持の必要性等について、親の意識や家庭環境等を改めて調べていかなければならないと考えている。

事例3 日常日本語は理解できるがクラスでの授業についていけない児童の学習指導の例

1 プロフィール

父親、母親とも日本人である。両親がカナダに移住して本児童はカナダで生まれた。日本に帰国する予定はなかったが、突然両親は日本に帰国することを決めた。本児童は生まれてからカナダで育ち、小学校3年で日本に来るまで現地校に通学していた。

1993年4月に来日した。一家が帰国する数カ月前に父親が日本に来て、住居や学校の手続き等をし、すぐに生活できるようにした。帰国後は父親は親戚の事業を手伝い今は母親も一緒に働き、とても忙しい生活を送っている。家族構成は父母、兄、姉、妹であるが、姉は市内の帰国子女学級のある中学校へ、妹は本校の2年に在籍し、ワールドクラスに通級して日本語を学んでいる。父母とは日本語で話すのが兄、妹とは英語で話している。

編入学当初、カナダの学校について質問すると、間違ったり、言いづらそうではあるが受け答えは片言の日本語でできた。しかし、英語のほうが話しやすそうであった。カナダにいた時、父母とは日本語で話すことはあったが、兄、姉、妹、学校、生活の場では英語を話していた。平仮名については書き順は間違えるが、書くことはできた。片仮名や漢字は全く読むことができず、書く事もできなかった。日常生活の日本語は大体理解することができた。

2 指導経過

○1カ月後

(適応の状況)

本児童は日本に来る際、カナダの友達と別れることを寂しが一方、日本に住むことを楽しみにしていたという。父親が帰国の3カ月前に日本に来て、本校への編入学を決めてから本児童は専任宛に英語の手紙を書いてきた。自己紹介、今通っている学校の紹介が書いてあり、写真が同封してあった。このように、日本に来るのを楽しみにするとともに少々恥ずかしがり屋だが友達というのが大好きなので、日本での学校生活も楽しくスタートすることができた。同じクラスに半年早くアメリカ、韓国から編入学してきて、本児童と一緒にワールドクラスで日本語を学んでいる二人の外国人の女の子と仲良しになり、放課後、親が迎えに来るまで遊んでいた。また、学区外通学であるがクラスの友人の家で遊んだりしていた。そのためスムーズに適応でき、日本の学校生活についての適応指導は特に必要ではなかった。

○3カ月後

(日本語の力)

日本語は、いつも友達と明るく話したり、遊んだりする中で急速に覚えていった。同じ敷地内に親戚が住んでいるので日本語を話したりし、日常使う日本語はほとんどわかるようになった。また、何でもこつこつとやる努力家でもあるので、3年生の授業についていけるかのように見えたが、授

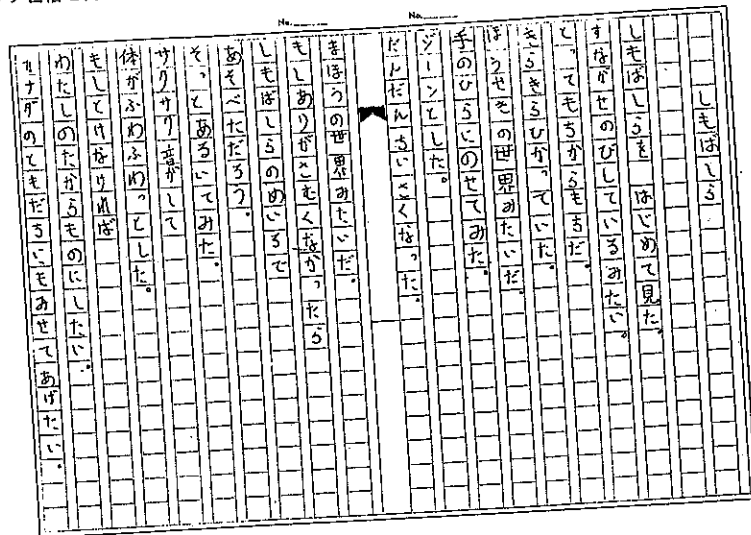
○1年後

(日本語の力)

日常会話は不自由なく話している。日本語独特の表現を使うこともあるが、適切に使われていないことがある。日本語を理解する力はかなりついてきているものの、教室での授業は、今一つ自分のもので消化していけないようだ。新しい学年(4学年)になり、授業のペースが本児童にとってはやいので、授業についていくのは大変である。

(指導内容と児童の様子)

ひき続き、言葉や漢字の読み書きを中心に指導してきた。習った言葉や漢字を使う場として日記や短文を書かせた。編入学8カ月後に書いた詩を郡の文集に応募したところ「入選」となった。これですべて自信を持てるようになると良いと思う。(入選作品を次に記載)



○1年3カ月後

4年生の国語の教科書を使って学習を進めた。言葉の意味や日本的な言い回しを一つ一つわかるように指導し、短い文作りをさせた。自分から進んで辞書を使って言葉の意味調べをし、文作りもとても上手にできるようになってきた。

教科書の内容を理解する力は少しずつついてきている。しかし、漢字が読めなかったり意味がわからなかったりするために、音読する時つかえてしまうことがある。4年生になり漢字の数が増えたため、さらに難しくなったようだ。読解問題をやっても問題の意味がわからないことがあるので、読んだりやり方を説明するようにしている。

○1年6カ月後

本児童は編入学約1年6カ月後、学級担任と相談をして取り出し指導を終えることにした。現在で

はワールドクラスの個別指導の時、自分で学習を進められるようになってきている。例えば、教科書を読んで意味のわからない言葉を辞書で調べる。意味がわかるようになったら、その言葉を使って文作りをする。時々、間違えて言葉を使うこともあるが、とても上手に文を作れるようになってきた。このように児童自身に学習の基本が備わってきている。しかし、授業で使われる言葉すべてを理解しているわけではないので、学習の様子をみながら個別指導が必要な時にはワールドクラスで指導を受けられるようにしている。

3 成果

- 学級担任と専任との連絡を密にとり児童の指導にあつたため、より児童の実態にあった個別指導をすることができた。
- ワールドクラスでの指導や学級での指導を通して、日本の学校に早く適応でき、落ち着いて学校生活を送ることができた。そして、意欲を持って学習に取り組むことができた。
- 学校全体で国際理解教育に取り組み、多くの外国人子女の受け入れをしてきているので、児童が違和感なく外国人子女を受け入れることができる。

4 課題

日本語を全く理解しない段階の児童に、ワールドクラスではテキスト「にはんごをまなぼう」を使って指導をしている。平仮名、片仮名の読み書き、学校生活の中で使われる日本語を学習する。その後、初期の段階の基礎的な日本語を理解できるようになるが、学級での授業は理解できないという段階に入る。本事例の児童のように、学級での授業を理解するための日本語力が不足していると考えられる場合は、教科書中心に読んだり書いたり(漢字や短文)の指導を行っている。算数や理科についても学習で使われる言葉がわからないと授業内容を理解することが難しい。そこで、ワールドクラスでは現在児童の実態を見ながら独自に指導をしている。しかし、理解するのは難しく時間もかかる。今後は、児童に適した教科ごとの指導内容や教材を整備する必要がある。

事例4 遊びや体験を中心にした適応指導

1 プロフィール

1993年10月来日。両親と3人兄弟の5人家族。家族全員 ブラジル国籍、日常会話はポルトガル語。日本語は全く話せず、編入学初日は通訳を伴って来校。姉は4年生、妹は2年生、弟は1年生に編入学。編入学2日前に同国籍の友達の母親と共に、生活科の学習「こどもまつり」を見学に来る。2年生の妹は、編入学初日の1・2校時は平仮名6文字（名前も含む）の練習。3～4校時は図工、「絵はかきたくない」と言って、同国籍児の友達の絵の色を塗る。4校時後給食を食べずに下校。学区外通学なので母親が迎えに来る。

父親がスポーツ関係者であるため、1年或いは2年と滞在期間が短い。また、いつまで日本にいるかはっきりしない。

3人の児童達は、ブラジルで生まれイタリアで育ち日本に来た。

昨年度、123日のうち欠席日数が82日。土曜日は休み、冬には長期休暇を取り母国へ一時帰国、言葉がわからない・今までの学校生活とあまりにも違いがある等により心身ともに不安定な状況におかれ不登校傾向に陥っての欠席となる。

今年度「日本語教室」が開設され、各クラスの国語・算数の時間に「日本語教室」へ通級し、専任のもとで、学校生活に一日も早く慣れ親しめるよう適応指導・日本語指導などを受けることとなった。

2 経過

(1) 通級当初の様子

4月5日 始業式 欠席（連絡なし）

3学年・5学年で組替えがあり、同国籍の友達と違うクラスになる。

前担任たちは同国籍児といつも一緒に、友達ができず頼り過ぎている面が多い。

面倒を見ている同国籍児も、授業中に話しかけられると集中できない等を考え思い切って別々のクラスにする。

4月6日 登校後すぐに、同国籍児に通訳してもらい、「日本語教室」のことを話す。5年生の姉は在籍学級へ行こうとせず、同国籍の友達と同じクラスでなければいやだと泣く。同国籍児は違うクラスを希望していたが、納得する。

3年生の児童も泣きはしなかったが同様に、3年生の同国籍児と同じクラスにしてほしいと訴える。が、教室へ案内するとすんなり中へ入り、休み時間にはクラスの友達と一緒に遊んでいた。下校まで教室で過ごす。

4月7日 入学式 欠席（連絡なし）

4月8日 3校時通級の4人がそろい、母国語で夢中になって話をする。担任だけが内容を理解できず聞いているだけで終わった。平仮名の実態調査をする。姉は半分位読めるが書けない。妹は文字カードは読めないが、絵カードでは5枚わかる。書くことはできない。弟も同じ程度。

こうして、4月が始まり1日2時間「日本語教室」へ来るようになるが、『日本の学校は嫌い。楽

しくない。』と泣くようになった。

日本語が話せない・読み書きもできない。その上、不登校気味というこの児童達に「日本語教室」では日本語指導・教科指導以前に、楽しく学校に登校できる雰囲気づくりをし緊張した心を和らげるように努めた。

当初一週間ぐらいは、顔つき、特に目つきがけわしく、怖さを感じさせられた。担任も言葉がわからず不安であったが、まずは、笑顔で接するように努めた。

挨拶・学校めぐり・自己紹介・教室にあるもの・数字・からだ……など、学校生活でまず必要とされる場合は、全員がブラジル籍なので日本語だけでなくポルトガル語でも指導した。文部省日本語指導教材「にほんごをまなぼう」教師用指導書の表現翻訳集がとても役立った。

母国の言葉でも学習できることにとても喜び、次第に笑顔も見られ話しかけてくるようにもなった。掲示物にも日本語だけでなくポルトガル語でも書き表すことにした。

(2) 1カ月後

① 近くの公園へ

天気のよい日に近くの公園へ行き、遊具で遊んだり遊具の名前を覚えたりした。タイヤを使っているジャンケン遊びは楽しそうで「チェンジ」と言っただけで、場所を変えたりチームを変えたりして何度も繰り返した。

「ぶらんこ」と遊具の名前を教えると「ノー、ブランコ、ブラジル、バランソ。」と大騒ぎの3年生。5年生の姉が「ブラジル、ブランコ、シロイ。」と教えてくれる。単語でのやりとりだが、ブラジルでは「ブランコ」は「白い」の意味で、ポルトガル語で「ぶらんこ」は「バランソ」ということがわかった。そして、児童達も「バランソ」は日本語では「ぶらんこ」だとわかってくれた。一つ教えると、次のものを指さし「ケ? (なに)」と聞くようになった。

② ザリガニつり

ザリガニやどじょうを飼い始めたら、登校するとまっすぐ様子を見に来るようになり、水を変えたり餌をあげたり世話をするようになった。手で持つこともできないのに、飽きもせずによく見ていた。

そのうち、ザリガニがほしい・ザリガニをつかまえに行きたい、と一生懸命自分の気持ちを伝えるようになった。「ザリガニがほしい」ということはすぐに理解できたが、「ザリガニをつかまえに行きたい」は、理解するまで時間を要した。児童も意思が伝えられずやきもきしているようだった。

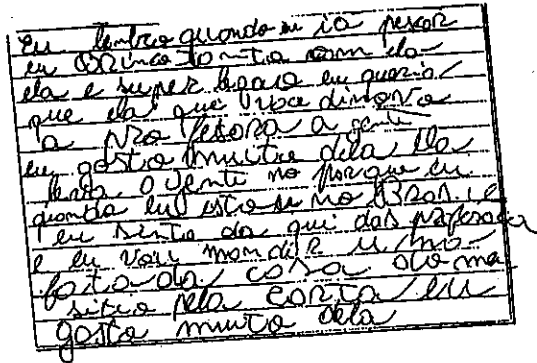
早速、近くを探し始めたが、学校の周りが高層住宅が建ち並んでいるのでザリガニはみつからなかった。毎日「ザリガニ、ドコ、イツ?」と聞かれた。やっと、少し離れたところに、車もほとんど通らず、騒いでも迷惑をかけない場所にザリガニをみつけた。

ザリガニ・どじょう・おたまじゃくし・カエルなどを目の前で実際に見たら、暑いことも臭いことも忘れ夢中になっていた。「ヤック! センセイ、ミテ! オオキイ、ジョウズ?」「センセイ、タスケテ、ハヤク」「チイサイ、ザンネン」などの言葉を、経験することで短い時間に覚えることができた。「帰ろう。」と声をかけると、次から次へとつれるので「モウスコシネ・チョットマッテ」と、楽しそうに日本語で返事がきた。

迎えに来た母親に、その日の様子をうれしそうに夢中で話しかけた。○○○達の話のうれしそうに聞き入る母親を見て、日本での楽しい思い出の一つになったかな……と思った。児童達と同様に、母親にも以前には不安げな様子がかがえたので、笑顔が見られ安心した。「アリガトウ、サヨナラ、アシタ」と、母親も児童達も今までにない笑顔で挨拶をして帰った。

児童の作文 3年生

私は一緒に釣りにいったのを覚えています。また、先生に連れて行ってもらいたいです。そして、先生が大好きです。いつも、公園に連れて行ってくれます。ブラジルから手紙で家の写真とかを送ります。



(3) 6カ月後

○ 運動会

2学期に入り、運動会の練習がはじまった。夏休みに手紙で運動会のことを知らせてあったので、楽しみにしていたらしい。しかし、体操服や赤白帽子を着用しない・行進練習の時ビーチサンダル・体育館での練習は参加するが、校庭での練習は「アツイ、ダメ」と参加しない・午後の練習に参加しないなどの問題がでた。初めての経験なので、わがままを言いながらも練習が始まったころは笑顔もなく緊張していた。他の子とあまり差がつかないように、短期間なので保護者に午後の練習も参加させてくれるように話した。翌日から昼食が届けられた。姉は、音楽が好きなのでダンスの練習をがんばっていた。

当日は大事な試合の日だったが、父親たちも午前中児童達に応援を送っていた。児童達は、笑顔を見せながら日本の児童達と同じように入場行進し、かけっこでは1位・2位と活躍、ダンスも上手に踊ることができた。

(4) 7、8カ月後

○ 校外学習

徒歩遠足や日帰りのバス遠足には、「ピクニック」と言って喜んで参加した。いつも自家用車で送迎されているので、長い道程を歩き通せるか気がかりだった。筑波山登山では「ツカレタ、マダ？」と、何度も目的地を聞いたそうだが、友達や先生に助けられ最後までがんばって歩き通したと聞き安心した。

連絡の手紙やしおりなどは、通訳や同国籍児にお願いしてわからないことがないように困らないようにと念を押した。「ワカッタ。」と返事をして帰宅したが、当日おみやげを買うお金を忘れた。

後日、校庭にある「山へ行こう。」と誘ったら、「ノー、ヤマ、ダメ、ツカレル、ヤダ。」と、山は筑波山のイメージがついてしまったらしい。

母国では、宿泊を伴う校外学習や運動会などの行事がなかったため、ずいぶん戸惑ったらしい。

5年生の姉は、○○○学校に参加できなかった。一番の問題は食生活の違いによるもので、普段の給食でもパンは食べられるがその他のものはほとんど食べられなかった。カレーライスや麺類なども食べない。また、生活習慣の違いで心配もあったようである。

「センセイ、イク？」と聞き、「一緒に行く。」と答えると、初めは楽しみにしていたが、「オカアサン、ダメ。」と少しがっかりしていた。

また、母国の授業は午前・午後・夜間の三部制であったこと、短期滞在の予定なので帰国後の学習が心配……などから、午前の授業を受け、午後は自宅でポルトガル語による母国の学習を家庭教師より受けていた。給食前に下校していたため、あまり日本の児童達とのふれあいがなかった。しかし、運動会のころは、同じ給食を食べることはできなかったが、一緒に食事をしたり昼休みに遊んだり掃除をしたりするという場でのふれあいができ声をかけあうようになった。

3 日本語指導について

(1) 遊びを通しての日本語指導

ジャンケン遊び・かるたとり・折り紙・仕掛け絵本作り・歌やゲーム・人形劇など体験的活動を通して日本語を話す機会を多くさせるとともに、先生を始め、たくさんの日本人と話す機会を多くもたせるように努めた。

そして、読み聞かせや人形劇、音楽を得意とする二人のボランティアの協力を得て、楽しみながら日本語を覚えさせた。

「頭・肩・膝・ボン」と歌いながら体の名称を覚えたり、「ふた・たぬき・きつね・ねこ」と動物のペープサートを持って歌いながら楽しく覚えたりするようにさせた。「先生の前」「テーブルの下」「読む」「書く」などの指示や動作はゲームを通して覚えさせた。また、語彙を増やすための絵カードも自作教材を使ってクイズ形式にするなど楽しみながら学習させた。

「三びきのこぶた」の人形劇では、ボランティアの方が用意してくれた小道具にびっくりし、日本語での話を興味深く聞き入っていた。話を聞いたあと、自分達で配役を決め劇を始めた。たった一回話を聞いただけなのに、「ブタノニオイガスルゾ。ブタハドコダ？」などと、ボランティアの方の話し振りをすっかりまねていた。

折り紙やビーズ・仕掛け絵本などにも関心を示し、「今日、何、ファゼール？（作る）」と聞き、楽しみにしている様子がかがえるようになった。

児童の作文より 5年生

学校がとても楽しくなりました。先生が助けてくれるので、少しは(言葉が)わかるようになりました。

話せるようになるのは、とても難いだろうと思っていました。みんなのおかげで、少しずつ話せるようになってきています。

イタリアでは、イタリア語を話せましたが、ここではもっと難しいです。

(ブラジルへ帰ったら)

別荘や牧場でたくさん遊び、馬に乗って遊びます。

Eu acho a escola legal porque
 não é toda a hora que eu não
 tenho um professor me ajudando
 muito.

Eu acho que não sou difícil falar
 com eles mas eu não sei falar

Eu acho eu sabia falar Italiano
 e aqui eu também consigo falar
 mas é mais difícil.

Eu sou muito mais feliz aqui
 porque eu não sou um menino de
 escola de onde eu sou.

(2) 日本の学校に慣れるための場としての「日本語教室」
 一日も早く日本の生活に適応するためには、日本語の能力を高めることが第一であるが、児童達の情緒の安定を図るために母国語的な雰囲気の中で、日本語だけでなく音楽や体育などの体を動かす活動をとり入れたりゲームなどで楽しみながら学習したりすることにした。
 自由な空気の中でのびのびと育った外国の児童達にとって、日本の学校はずいぶん窮屈なものだったらしい。しかし、「日本語教室」が開設され児童達にとって居心地のよい場となり、日本の学校にも少しずつ慣れつつある。

4 成果と課題

- ・当初は、ブラジルと日本との国民性・習慣の違いによるギャップから戸惑う事が多かったが、二人のボランティアの力強い協力を得て、歌やゲーム・人形劇等の興味を引く教材も取り入れることにより、最近では楽しみながら日本語を学んでいる。
- ・「日本語教室」がストレス解消の場となった。廊下で楽しそうに歌を口ずさんだり踊ったりするようになり、表情が明るく笑顔も見られ、日本の学校に慣れてきた。
- ・日本語指導は、遊びを通して楽しみながら学習できるように心がけてきたが、45分間飽きさせないように今後も教材教具の工夫が必要と思われる。
- ・家庭ではポルトガル語で会話、母国へ帰国してからを心配しポルトガル語での家庭教師による母国の学習。児童にとって、日本語を覚えなくても不自由のない生活。そして、1年あるいは2年で帰国ということからも日本語を覚えようという意欲・関心があまり感じられない。

事例5 広東語を話すYちゃんが日本語でも話せるようになった

1 生育歴

プロフィール

Yの両親は香港人であるが離婚によりYは母親の元に引き取られる。母親の両親が台湾へ住んでいたため一時、そこへ預けられる。後に母はYを連れて日本人である現在の夫と再婚する。妹が二人誕生する。今5人家族である。

父親の仕事の都合で12才の6年生の8月に来日する。香港では9月に中学生になるが日本では半年後である。広東語を日常会話とし、香港の現地校に在学していた。編入学当初、父親は、現地では大変に問題の多い子であったので心配であると話していた。

来日が決まると、香港で日本語の学習を半年行った。本校へ編入学してきたときは、五十音は読み書きができていた。語彙は少なく、単語を並べる程度である。

2 指導記録

学年決定で悩む

- 8月当初
- ・9月2日より二学期が始まるため、父、母、本人、妹2人と一緒に事前打ち合せに来校。教頭と帰国子女担当で対応する。父親より日本語ができないということで、現在の学年でなく、一学年下げたらどうかという相談があった。だが、身体が大きいので精神的に苦痛ではないかとどう心配もある。そこで、まだ時間があるため、保護者と本人の意向を尊重しよく考慮してから二学期の始業式に学年を決定することにした。
 - ・アジア系の顔立ちで、明るい感じの子である。日本語で「こんにちは」と笑顔で挨拶した。日本語ができるのは、父親だけである。母親と妹は広東語である。日常会話は、英語と広東語である。
 - ・学校で必要な体操服、上履き等の説明をし、通学路の確認をした。必要な物は、徐々に購入していくことにし無理に買い揃える必要はないと連絡した。

日本語話せない私・迷子

- ・9月の始業式。6年生に編入する。
- 9月
- ・来校、2週間目にして登校時間に間に合わなくなる。そこで、本人はバスに乗れば早く学校に着くであろうと思いバスに乗る。このころは日本語が話せないため、自分がどうしたら学校にいけるか知らせる方法がなく困ったそうだ。学区外通学であるが普段は徒歩で通学できる距離であるから、まさかバスに乗ってしまったとは考えられなかった。近道をしようとして迷子になったのであろうと、教師や保護者は自宅と学校周辺を捜していた。言葉がわからないと、大変不自由であることを身を持って体験したことは、今後の学習意欲に大きな影響を与えた。

日本語診断 exams

- 9月
- 運動会行事に追われていたが、体を通して言葉に触れることは、結果的には功を奏したようだ。自分の行動を単語で表現していた。
 - 学級で過ごす時間を多くし、取り出した指導は一日2時間で、日本語学習を中心に行うことにした。
 - まず初めは、日本語習得度診断テストで日本語がどの程度身に付いているか調査した。教師の指示することがどの程度理解できるか把握しておく必要がある。
 - 多くの事に取り組むと、言葉が思うように通じないために教師も本人も負担が大きいのので、ゲームや遊びや学校探険と称して散歩にでたりしながら進めていった。
 - 日本語指導教材として、本校独自の「たのじい にほんごⅠ・Ⅱ」と学芸大学の日本語教材と近隣校の教材を使用した。
 - 語彙は少ないが、濁音や半濁音、カタカナ等をぬかしてひらがなの読み書きは習得していた。この時期は、文字が読めたからその言葉の持つ意味まで理解しているかと言うとそうではない。例えば色鉛筆で言うと、みどり、ももいろ、と読んでも実物と言葉が一致していないために色を取り出せないということもあった。

世界のおともだち ともだち 9/13

6年2組 名前

在香港我認識到很多朋友在香港我認識了超過一百多個朋友而現在在日本認識了十多個,如果每日我的朋友知香港比較日本人比較友善,有時常幫你解決難題,我覺得這樣不太好,因為到一些時會使我形成十分之依賴別人,這不太好,而在香港什麼都要自己,不能依賴別人,雖然幫助別人是應該的,但幫得太過份就不是太好了,香港的朋友都有幫助人的,但就不會幫過份,而我就比較喜歡香港的朋友。

(2枚目)

学校では、毎日日本語の勉強をしています。日本語は、日本人と香港人の間で、日本人は比較的親切で、人を助けようとする傾向があります。しかし、時々あなたに問題を解決してあげてくれます。私は、時々あなたに頼りすぎて、あなたに依存するようになります。これは、あまり良くありません。香港では、何でも自分でやる必要があります。他人に頼りすぎると、人に迷惑をかけることになるので、あまり助けすぎると、それは良くありません。香港の友達には、みんな助けようとする人が多いですが、助けすぎると、それは良くありません。私は、香港の友達が好きです。

言語は音声言語から

- 10月
- 9月から10月にかけて日常必要な名称、語彙を増やすことに努めた。学校生活や学習用語で特に必要と思われる、あいさつ せんせい がっこう 教室にあるもの 尋ねる言い方 特別教室 人稱 教科 家族構成等について学習した。
 - 日本語は広東語と異なる口形があるため、発音したものに誤りが見られる時もあった。特に、拗音 濁音 発音 促音など何度も発音させたり、動作をさせたりして学習したことはすぐ定着するように努めた。
 - 口形がしっかりしていないことと、聞き慣れていないために「はいぜんたい」を「はいぜんたい」、「ともだち」を「ともたち」、「でんわ」を「てんわ」と発音する。「だ行」が「た行」になることが多い。書くときも音声で聞こえた通りに記述するため同じような間違いをする。濁音はむずかしいようだ。
 - 家族との会話は広東語であるため、家庭学習には日本語の音と口形が一致するように、絵カードとカセットテープを持ち帰らせた。家庭でよく練習し成果をあげた。
 - 黒板に(今日 私 昼 掃除 加奈ちゃん 山口さん もう一人 教室 算数資料室 廊下 ランチルーム 20分)と書いた。「今日 私は、昼体みに、加奈ちゃんと山口さんともう一人で算数資料室の掃除を20分やった。」と言うとうなずく。
 - この頃になると(私 友達 言う わかる 私 話できない)と単語を並べて話すようになった。
 - 単語を並べたり、自分の欲求を意思表示したりするようになってきたので、日記を書き始めようとなげかける。最初は、広東語混じりのものであったが、口頭作文的にはじめた。

日本語習得度診断テスト (読む・書く) 資料3

国	教師	児童の反応	判定
1. こんにちは	a. 何も答えない b. おじぎする もしくは金銭 c. 「こんにちは」と答える。		
2. すわりなさい	a. すわらない b. すわる		
3. 名前は何と申しますか。	a. 何も答えない b. 母語で答える c. 日本語でこたえる。		
4. 名前を書きなさい。	a. 何もしない b. 書こうとするが文字がわからない c. 書ける		
5. 日はどこですか (例として目をさしてみせる)	耳 a. わからない b. わかる 目 a. わからない b. わかる 鼻 a. わからない b. わかる 舌 a. わからない b. わかる 足 a. わからない b. わかる		

日本語習得度診断テスト (聞く・話す) 資料1 <Test 1>

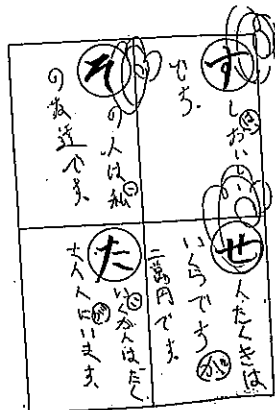
国	診断テスト	話す
(1)日本語が全く分からない。	<Test 1>	(1)全く日本語が話せない。
(2)ごく簡単な指示がわかる。		
(3)身の回りの言葉が少しわかる。	<Test 2>	(3)身の回りの言葉が少し話せる。
(4)身の回りの言葉がだいたいわかる。		(4)身の回りの言葉がだいたい話せる。
(5)簡単な質問に対して単語で答えられる。	<Test 3>	(5)簡単な質問に対して単語で答えられる。
(6)簡単な文の意味がわかる。		(6)簡単な文の意味がわかる。
(7)簡単な文の意味がわかる。		(7)簡単な文の意味がわかる。
(8)簡単な文の意味がわかる。		(8)簡単な文の意味がわかる。
(9)簡単な文の意味がわかる。		(9)簡単な文の意味がわかる。
(10)簡単な文の意味がわかる。		(10)簡単な文の意味がわかる。
(11)簡単な文の意味がわかる。		(11)簡単な文の意味がわかる。
(12)簡単な文の意味がわかる。		(12)簡単な文の意味がわかる。
(13)簡単な文の意味がわかる。		(13)簡単な文の意味がわかる。
(14)簡単な文の意味がわかる。		(14)簡単な文の意味がわかる。
(15)簡単な文の意味がわかる。		(15)簡単な文の意味がわかる。
(16)簡単な文の意味がわかる。		(16)簡単な文の意味がわかる。
(17)簡単な文の意味がわかる。		(17)簡単な文の意味がわかる。
(18)簡単な文の意味がわかる。		(18)簡単な文の意味がわかる。
(19)簡単な文の意味がわかる。		(19)簡単な文の意味がわかる。
(20)簡単な文の意味がわかる。		(20)簡単な文の意味がわかる。
(21)簡単な文の意味がわかる。		(21)簡単な文の意味がわかる。
(22)簡単な文の意味がわかる。		(22)簡単な文の意味がわかる。
(23)簡単な文の意味がわかる。		(23)簡単な文の意味がわかる。
(24)簡単な文の意味がわかる。		(24)簡単な文の意味がわかる。
(25)簡単な文の意味がわかる。		(25)簡単な文の意味がわかる。
(26)簡単な文の意味がわかる。		(26)簡単な文の意味がわかる。
(27)簡単な文の意味がわかる。		(27)簡単な文の意味がわかる。
(28)簡単な文の意味がわかる。		(28)簡単な文の意味がわかる。
(29)簡単な文の意味がわかる。		(29)簡単な文の意味がわかる。
(30)簡単な文の意味がわかる。		(30)簡単な文の意味がわかる。
(31)簡単な文の意味がわかる。		(31)簡単な文の意味がわかる。
(32)簡単な文の意味がわかる。		(32)簡単な文の意味がわかる。
(33)簡単な文の意味がわかる。		(33)簡単な文の意味がわかる。
(34)簡単な文の意味がわかる。		(34)簡単な文の意味がわかる。
(35)簡単な文の意味がわかる。		(35)簡単な文の意味がわかる。
(36)簡単な文の意味がわかる。		(36)簡単な文の意味がわかる。
(37)簡単な文の意味がわかる。		(37)簡単な文の意味がわかる。
(38)簡単な文の意味がわかる。		(38)簡単な文の意味がわかる。
(39)簡単な文の意味がわかる。		(39)簡単な文の意味がわかる。
(40)簡単な文の意味がわかる。		(40)簡単な文の意味がわかる。
(41)簡単な文の意味がわかる。		(41)簡単な文の意味がわかる。
(42)簡単な文の意味がわかる。		(42)簡単な文の意味がわかる。
(43)簡単な文の意味がわかる。		(43)簡単な文の意味がわかる。
(44)簡単な文の意味がわかる。		(44)簡単な文の意味がわかる。
(45)簡単な文の意味がわかる。		(45)簡単な文の意味がわかる。
(46)簡単な文の意味がわかる。		(46)簡単な文の意味がわかる。
(47)簡単な文の意味がわかる。		(47)簡単な文の意味がわかる。
(48)簡単な文の意味がわかる。		(48)簡単な文の意味がわかる。
(49)簡単な文の意味がわかる。		(49)簡単な文の意味がわかる。
(50)簡単な文の意味がわかる。		(50)簡単な文の意味がわかる。
(51)簡単な文の意味がわかる。		(51)簡単な文の意味がわかる。
(52)簡単な文の意味がわかる。		(52)簡単な文の意味がわかる。
(53)簡単な文の意味がわかる。		(53)簡単な文の意味がわかる。
(54)簡単な文の意味がわかる。		(54)簡単な文の意味がわかる。
(55)簡単な文の意味がわかる。		(55)簡単な文の意味がわかる。
(56)簡単な文の意味がわかる。		(56)簡単な文の意味がわかる。
(57)簡単な文の意味がわかる。		(57)簡単な文の意味がわかる。
(58)簡単な文の意味がわかる。		(58)簡単な文の意味がわかる。
(59)簡単な文の意味がわかる。		(59)簡単な文の意味がわかる。
(60)簡単な文の意味がわかる。		(60)簡単な文の意味がわかる。
(61)簡単な文の意味がわかる。		(61)簡単な文の意味がわかる。
(62)簡単な文の意味がわかる。		(62)簡単な文の意味がわかる。
(63)簡単な文の意味がわかる。		(63)簡単な文の意味がわかる。
(64)簡単な文の意味がわかる。		(64)簡単な文の意味がわかる。
(65)簡単な文の意味がわかる。		(65)簡単な文の意味がわかる。
(66)簡単な文の意味がわかる。		(66)簡単な文の意味がわかる。
(67)簡単な文の意味がわかる。		(67)簡単な文の意味がわかる。
(68)簡単な文の意味がわかる。		(68)簡単な文の意味がわかる。
(69)簡単な文の意味がわかる。		(69)簡単な文の意味がわかる。
(70)簡単な文の意味がわかる。		(70)簡単な文の意味がわかる。
(71)簡単な文の意味がわかる。		(71)簡単な文の意味がわかる。
(72)簡単な文の意味がわかる。		(72)簡単な文の意味がわかる。
(73)簡単な文の意味がわかる。		(73)簡単な文の意味がわかる。
(74)簡単な文の意味がわかる。		(74)簡単な文の意味がわかる。
(75)簡単な文の意味がわかる。		(75)簡単な文の意味がわかる。
(76)簡単な文の意味がわかる。		(76)簡単な文の意味がわかる。
(77)簡単な文の意味がわかる。		(77)簡単な文の意味がわかる。
(78)簡単な文の意味がわかる。		(78)簡単な文の意味がわかる。
(79)簡単な文の意味がわかる。		(79)簡単な文の意味がわかる。
(80)簡単な文の意味がわかる。		(80)簡単な文の意味がわかる。
(81)簡単な文の意味がわかる。		(81)簡単な文の意味がわかる。
(82)簡単な文の意味がわかる。		(82)簡単な文の意味がわかる。
(83)簡単な文の意味がわかる。		(83)簡単な文の意味がわかる。
(84)簡単な文の意味がわかる。		(84)簡単な文の意味がわかる。
(85)簡単な文の意味がわかる。		(85)簡単な文の意味がわかる。
(86)簡単な文の意味がわかる。		(86)簡単な文の意味がわかる。
(87)簡単な文の意味がわかる。		(87)簡単な文の意味がわかる。
(88)簡単な文の意味がわかる。		(88)簡単な文の意味がわかる。
(89)簡単な文の意味がわかる。		(89)簡単な文の意味がわかる。
(90)簡単な文の意味がわかる。		(90)簡単な文の意味がわかる。
(91)簡単な文の意味がわかる。		(91)簡単な文の意味がわかる。
(92)簡単な文の意味がわかる。		(92)簡単な文の意味がわかる。
(93)簡単な文の意味がわかる。		(93)簡単な文の意味がわかる。
(94)簡単な文の意味がわかる。		(94)簡単な文の意味がわかる。
(95)簡単な文の意味がわかる。		(95)簡単な文の意味がわかる。
(96)簡単な文の意味がわかる。		(96)簡単な文の意味がわかる。
(97)簡単な文の意味がわかる。		(97)簡単な文の意味がわかる。
(98)簡単な文の意味がわかる。		(98)簡単な文の意味がわかる。
(99)簡単な文の意味がわかる。		(99)簡単な文の意味がわかる。
(100)簡単な文の意味がわかる。		(100)簡単な文の意味がわかる。

母語でストレス解消

- 広東語で日本の学校、友達について作文を書くように指示すると下記のように書いた。母語で書くことでストレスの解消をはかった。近隣校の先生に解釈していただく作文では、日本人と香港人の精神文化の違いをYちゃんなりに鋭い感覚で書いている。

文型で話すYちゃん

11月



- ・～です。～でした。質問の言い方。依頼の言い方。教授の言い方。文型を取り入れて、日常会話に慣れる。
- 「飛行機に乗ったことがあります。」「乗る」が「乗った」に活用しているので、規則性がある変化していることに気づいたことはよいが、「パンダを見たことがあります。」「～を見る。」を「～を見た。」にしていた。
- この頃より、接続詞の それから そして つぎは を使うようになる。
- ・「先生 バスケット」といってから一息いれて、「先生 今日 バスケットの練習ありますか。」と文型で質問するようになってきた。
- ・編入してから三カ月が過ぎようとしているが、家庭では、広東語と英語で過ごしているという。
- ・Yちゃんは、近ごろ笑顔がふえ、声が大きくなり行事に積極的に参加している。

黒板へ伝言文を書く

- 12月
 - ・読解指導 聴解の学習。
 - レストランや電話の応答。日本料理や地震の説明文を読み取る。光村 国語の基本(言語) 2年生の教材を解くことができるようになってきた。初めて触れる言葉には質問するが、意味が分かるとどんどん自分で進めていくことができるようになった。3センテンスぐらいの日記を毎日書くようになった。
 - ・黒板に「先生 3時間目は、体育です。きょうの3時間目の勉強はできません。Yより。」と伝言を書いていくようになる。
- 1月
 - ・「あかずきん」の物語を録音した。物語の内容をしっかりとつかんで、声色をかえて朗読していた。
 - ・読解 聴解 文法(条件の表現 状態を表す言葉 同時進行)の学習
 - 同時進行の学習では、「私は、運転しながらご飯をたべます。」と言うとすぐにおかしいと指摘してきた。だんだん意味が理解されてきている。
 - ・光村 国語の基本3年(言語)の学習をはじめた。

濁音は苦手

- 2月
 - ・読解 聴解 文法(尊敬 謙譲 推定 様態 条件)の学習
 - ・文章を書くとき、濁音、助詞の誤答が多い。

(ねこを、いこ) (おもしろかったです。を、おもしろかったです。)

(さいが ぞうをたすけてあげます。を、さいが ぞうにたすけてあげます。)

- 3月
 - ・読解の学習をする。読書を通して、感想を発表したり、読書ノートにまとめる。
 - ・卒業準備のため諸行事に参加。卒業式では呼び掛けの言葉を堂々とワンフレーズ一人で言った。

3 成果

- ・指導者が各国の言葉を理解しているわけではない。そこで、母語を用いなくても日本語の指導が直接指導できるように、本校独自の日本語教材を作成してある。それを活用することで、国語指導とは違った純然たる日本語指導ができた。また、他校の教材をストックしてあるため併用できた。教材の中に絵を多く取り入れてあるので説明がしやすく学習者にとっても理解の手助けとなったようである。
- ・日本語習得度診断テストがあったため、児童の日本語力の実態を把握しやすかった。
- ・学習者の実態に応じて日本語指導計画を組み替えて指導していったことは、学習の効率を良くした。
- ・専任教諭と担任との連絡をとりあうことで、学習者の不安を取りのぞくことができた。

4 課題

- ・高学年で編入した場合は、学習に必要な学習用語を身に付けるために、教科指導を通した日本語指導教材を作成する必要がある。
- ・日本語指導に必要な教具の開発と、教具の購入が十分にできるとよい。
- ・専任の教員を増やし、研修の場を与え指導力の向上が図れるとよい。
- ・日本語指導については、今回初めての経験で手探りの状態であったため、効果的に指導できたか不安である。日本語指導の相談機関があるとよい。

II 中学校の指導実践の事例

事例6 GUSTO KO ANG JAPAN (日本 大好き)

異文化理解の実践を通して

1 本人のプロフィール

1979年フィリピン生まれ。(女子) 母国語は、タガログ語。

1992年10月7日フィリピンから来日。

家族は、父親(日本人) 母親(フィリピン人) 姉(フィリピン人) と本人の4人。フィリピンでは、もう一人の姉と祖母がいるが、母親が日本で働いていて、現在の父親と結婚することになり、二人が呼び寄せられた。(実の父親は、彼女が幼い時に、亡くなっている。) その年の10月、姉は中学2年 本人は中学1年に編入学、この時、日本語はまったく話せない状況であったが、現在のような日本語教室はなかったため普通の学級に入り、翌日から授業を受ける。

2 経過

「りんご好き?」

・来日時 日本語は、まったく話せない。教室では、じっと座って授業を受けていたが、内容はまったく理解できない状況であった。クラスの中でも優しい女子生徒数人が、身ぶり手ぶりで話をして、学校生活を援助してくれた。登下校は、いつも姉と一緒に、日本での生活の不安や、学校生活での悩みなどを話していた。言葉の壁があり、生活習慣、学校生活には適応できなかった。

・3ヶ月後 少しずつ日本での生活に慣れてきたが、まだ日常会話は、片言でしかできない。クラスの友達にも自分から接することがないため、あまり仲の良い友達ができず、一人であることが多かった。そんな中、友人の一人が初めて質問した言葉は、「りんご好き?」だった。自分から話しかけることもできず、ずっと黙っていた彼女にとって嬉しい言葉だったという。授業の内容は、ほとんどわからなかったが、板書した内容は、黙々とノートを取っていた。

・1年後 日本語教室で、台湾の友人ができた。日本語の学習にも前向きに取り組み始めるようになり表情も明るくなってきた。しかし、9教科の授業の中には少しずつ好き嫌いが出てきて、体育の授業をサボって、日本語の授業にいることもあった。(グループ分けなどをする時に孤立してしまうことがあったため)

現在 日本語教室での学習の成果も上がり、日常会話には、あまり不自由しなくなってきた。日本語能力検定試験問題の聴解4級はほとんど理解できた。漢字については、小学校2年程度までなら書けるようになってきている。しかしまだ作文や手紙文などは、

自分の考えていることをまとめられない。

来日した当時と比べると、ずいぶん学習に対して前向きになってきた。中間テストや期末テストなどについても今まであきらめていた教科の学習にも積極的に取り組み、こつこつ努力するようになった。学校生活にも適応し、友達もできた。最近の問題点と言えば、タガログ語をあまり使わなかったために少しずつ忘れかけていることである。

3 日本語教室での学習の様子(1学期~2学期)

◇「これ、何?」

* オリエンテーションでは、簡単なゲームを取り入れ、自己紹介を行った。

「私は、〇〇です。」と言う簡単な話し方から少しずついろいろな質問をして、わからない時は、パントマイムで答えるという方法。などやかな雰囲気になった。

* 生活習慣の内容について知るために、校外学習を実施した。行き先は、郵便局、大手スーパー、駅、図書館などである。郵便局では、手紙の書き方、預金の仕方、切手やはがきの購入の仕方、郵便局の利用について郵便局の職員の方から親切に教わった。

スーパーでは、洋服などのサイズ表示の違いや、いろいろな商品の名前など、売り場を回りながら教えた。売っているものが、何に使うものかわからず質問することが多かった。

スーパーでの会話(家電売り場にて)

M: 「せんせ、これ何?」

T: 「それは、オーブントースター、パンを焼くの。フィリピンでは使わなかった。」

M: 「フィリピンではなかったよ。」

T: 「そう、じゃ他にもフィリピンで使わなかったものある?」

M: 「電子レンジ、クーラー、CDラジカセ、洗濯機。もっといっぱいあるよ。」

T: 「へえ、洗濯機も使わなかったの。それじゃどうやって洗濯していたの?」

M: 「せんせ、手で洗うに決まってるよ。」(笑)

T: 「なるほど・・・」

このような会話が続き、スーパーの中を歩き回り、いろいろな商品と名前、使い方について説明した。スーパーにきたのは、はじめてではなかったが、店員さんと話をするのもなかったため、知らないものも多かったようである。

* 食品売り場では、「何これ?」の質問がづく。きな粉、のり、海藻、乾物類は説明しにくい。「それは、みそ汁に入れるもの。」「これは、海でとれるもの。」という程度の説明に「わかった。」と納得。本当にわかったかどうかはわからないが・・・。

* 駅では、電車の乗り方、切符の買い方、時刻表の見方などについて学習した。

* 図書館では、利用の仕方、本の借り方、返し方、図書カードの作成について図書館の職員から話を聞いて実際に本を借りてきた。

これらの、校外学習は、生活習慣、その他日常生活の中で役立つことに... と思う。

◇出会いと別れ

日本語教室に、中国からの転入生が入り、3人で学習することになった。台湾の生徒と、中国語で話をするため、少々おもしろくない様子。「日本語で話をしないとだめだよ。」と、台湾の生徒に注意する時もあった。しばらくして、「私、日本語教室へ行きたくない。」といい始めたので、理由を聞いてみると、二人だけで話をしているのでつまらないと言う。「中国から来たTさんは、来たばかりで不安なので、しばらくの間は、中国語で話をさせてあげようよ。Mさんだって日本に来たばかりの頃は不安だったはず。でもあなたには、お姉さんがいたでしょう。」と言うと「そうだね。私は、お姉ちゃんと話してきたもね。Tさんは独りぼっちだからかわいそうね。」と言い納得できたようだった。数日後、3人ともすっかり仲良くなり、日本語を学習するようになっていた。

- * 日本語の授業は、音や様子を表す言葉、反対の言葉、カタカナで書く言葉、ひとまとめにした名前についての学習から始めた。カタカナが意外に難しい。書くことよりも読み方、アクセント、発音につまっていた。
- * 物語を読む、(図書館から本を借りてきて、少しずつ読み進めた。) 幼時向けの絵本(イソップ物語)を読み、おもしろいと言って喜んでた。

この頃、日本語教室で仲の良かった台湾の生徒が、急に帰国することになり、元気をなくしてしまっただ。「また会おうね。」ということばを黒板に書き、住所を教え合った。一番ショックだった中国の生徒を一生懸命慰めていた。

- * 手紙の書き方、(時候のあいさつ、文章の書き方、あて名の書き方について学習した。
- * 文化祭にむけて、自分の国の紹介、フィリピンや中国の郷土料理を作り紹介した。
- * 日本の伝統文化である書道、茶道を行う。

◇和室でのひとこま

茶道の時の会話 (和室にて)
初めて着物を着ることが、嬉しくてたまらない様子。姿見に自分の着物姿を映し恥ずかしそうに笑っている。

M: 「せんせ、私、日本の着物好きよ。きれいだから・・・写真とってね。」

T: 「いいわよ。とても似合うよ。この着物、帯はどう、きつくない?」

M: 「大丈夫。ずっと着ていたいなあ・・・お姉ちゃんにも着せてあげたい。」

T: 「それでは、お茶のたて方を説明します。まずはじめに、用具の名前から。これは、なつめ、茶杓、茶せん・・・etc」じっと見つめる目は真剣。お菓子のはこび方、作法を教えると、早速「やってみる。」と言う。

M: 「せんせ、まずお菓子を食べるんでしょう。」

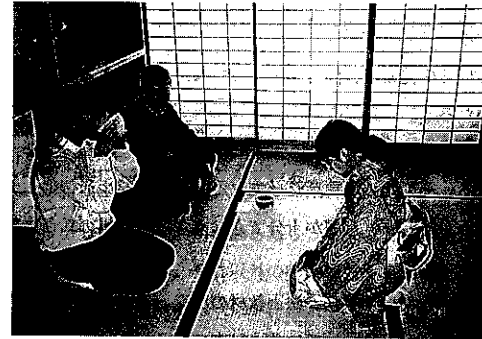
T: 「そうそう、()の人に、お先に、と言ってからね。」

M: 「わあ、おいしいこのお菓子」 きれいな和菓子に感動した様子。

T: 「それでは、Tさんのたてたお茶をいただいて。」

M: 「おいしい。それにしてもこの茶わん大きいね。もっとお菓子食べたいな。」

T: 「残念ながらこのお菓子は、一人一個です。」 (笑)



着物を着たのは、初めてでとても嬉しかったようである。初めて口にしたり和菓子やお茶も「とてもおいしい。」と言い、外国人講師やたくさんの先生方を招待して楽しいひとときを過ごした。日本語教室の友達が、一人転出し、元気をなくしていたが、このような体験学習を通して、少しずつ明るく活気のある授業になっていったように思う。文化祭では自分の国の紹介と同時に、日本の文化を体験することによって、コミュニケーションを深めていった。

4 成果と今後の課題

(成果)

* 学校生活に適応できるようになった。

初めの頃、学校がいやでたまらなかつたそうである。言葉の壁があり、何もわからず不安だった。フィリピンの学校は、半日なのに、日本は長い。さまざまな悩みがあっても学校の先生には相談できなかったという。日本語教室ができ、二人の教師が担当することになってからは、精神的に安定し、学校生活にも適応できるようになった。

* 日常生活の会話ができるようになった。

日本語教室での学習の初めの10分は、いろいろな会話をした。普段は、無口な方だが家での様子や、料理の話などずいぶん話ができるようになってきた。発音や、アクセントなど違っている時は注意してあげると、正しい言い方ができるようになってきた。

* 友人ができ、仲間とのコミュニケーションがとれるようになった。

1年くらい前までは、何をやるにも一人でいることが多かった。しかし、日本語教室で学習する友達ができ、そこで話をしたり、悩みを相談することにより、自然にクラスの友達ともコミュニケーションがとれるようになった。

* 日本語及び教科の学習に前向きに取り組むようになった。

中学校では、9教科の学習をしなければならぬ。言葉が理解できないと、教科の内容も理解できないことが多い。しかし、一人で日本語を担当する教員を決め、担任と教科担任と連絡をとりながら、日本語の基礎的な学習をすすめてきた。この生徒の場合は、学習に前向きで、少しずつではあるが、教科の学習にもついていけるようになっていく。

*日本での生活に適応し、将来の希望をもつようになった。

初めのころ「学校はつまらない。」「自分が生まれた国へ帰りたい。」と言っていた生徒が今では、「学校は楽しい。日本で生活していきたい。将来は、お金をためて専門学校に行き、美容師になりたい。」と話すようになった。

最近では、「せんせ、私日本に来てよかった。いい人がいっぱいいるし、学校も楽しい。だから私、日本大好き」と言う。

(課題)

*それぞれの日本語のレベルにあった指導をする。

日本に来て間もない生徒から、数年たっている生徒まで、同じ学習指導では、無理がある。それぞれのレベルにあった学習指導ができるとよいだろう。

*担当教員の、研修、指導力の向上を図る。

外国人子女は、いろいろな国からやって来る。そのため、言葉だけでなく、文化や、生活習慣に大きな違いがある。当然一人の教員だけでは対応が難しく、指導が十分できなくなる。担当の教員に研修の場を与え、指導力の向上を図る必要があると思う。

*母国語の学習及び教科の内容について理解を深めるための学習方法と教材の開発。

日本語は、だいたいできるようになっても、母国語を忘れかけている。日本で生活していても、いつ母国に帰ることになるかはわからない。その時のためにも、母国語の学習は必要であると思う。日本語の学習と平行に、母国語の学習もどのように進めていけば良いのか考えていくことが大切であると思う。

9教科の学習も、専門用語などは、母国語で解説するのが一番わかりやすい。教科別の学習の手引きのようなものがあるとよい。教材、教具の開発も重要であると思う。

事例7 我(心愛(僕の宝物) 作文指導を通して

1 本人のプロフィールおよび経過

1994年8月、家族で中国から来日(父親、母親、弟の4人)

その年の9月から、学区の中学校に編入学する。

父親は貿易関係の仕事をしており、日本語での生活に不自由はない。本人は、来日前後に父親から日本語を少し習った。母親は、市主催の日本語教室に通っており、徐々に日本語が理解できるようになってきている。

9月1日に、初めて来校したときは、言葉もよくわからず、何となく不安そうであったが、もともとの知的レベルも高く、また相当な努力家であり、今では日常の会話には、ほとんど不自由なく、学級の中にもよくとけこんでいる。

取り出し授業は、当初は週あたり3時間(国語の時間を充当)で、主に口頭の日常会話から始め、文字の習得へと進んだ。それ以外の時間は教室で他の生徒と一緒に授業を受ける。当初は、日本語の日常会話にも不自由な面があったが、授業中、板書を写す、課題を解く(数学などは、比較的容易に入れた)などの姿勢には、積極的なものが感じられた。以下は、その変化である。

4か月

学校にも慣れ、授業中、発表もするようになる。卓球部に入部し、活動を始める。その動機は、他の日本人の生徒と一緒に、部活動をすればという父親の勧めである。この部活動を通して、他校との練習試合の参加(切符を買って電車に乗る。)など活動範囲も広まる。

7か月

日常の会話には、あまり不自由がなくなる。それにつれて、もっと授業をよく理解したい(日本語で中学校の学習内容、特に国語や社会を理解するには困難が伴う。)、日本のことを知りたいという学習意欲が増してくる。取り出し授業にも、補習的に教科指導を組み入れるようになる。

2 作文指導を通して

(1) 作文指導の効用

一、二行の簡単な文であれば、日本語で綴ることができるようになった次の段階として、長文の作文を試みる。これは、他の生徒と同じように自分も長文を綴りたいという本人の欲求によるところが大きい。「自分も長文を書いてみたい。」と本人が言ったとき、当初、その理由がよくわからなかったが、指導する中、決まった文型練習を脱し自分の思いや考えを文字で表現し人に伝えたいという意欲から来ていることがわかった。逆に言えば、簡単な会話や作文はできるようになったものの、自分のより深い面を表現する場が今まではなく、その場の設定することが彼にとって必要なことであった。

(2) 指導事項

① 読書感想文

思春期の生徒の心を成長させるものとして、読書は欠くことのできないものである。またその感想を書くことにより、その成長の証しを知ることができる。単に外国で生活しているその国の言語が自分の母国語と違い、難しいというだけで、読書による内面の成長を無理だと決めつけてはなるまい。

また、中学生という発達段階を考えたときに、日本語能力に応じてということで、小学生レベルの読み物を与えても、心の内面を充実させることは不可能であろう。そこで考えた方策として、まず母国語(中国語)での読書ならびに感想文、そして、それを日本語に訳していくという形態を採用した。そして、訳出の際、教師の中文訳を生徒に書き取らせるという形態も可能であったが、あえて、教師と生徒と一緒に一冊の中和辞典を片手に、どうすれば日本人に思いが通じていくかを考える形態をとった。そのことにより、本人も自分の書いた文章の一語一語を正確に確かめつつ和訳表現ができたと思う。その結果、自分は臆病で自信がないと思っていること、そして何事も自信を持って向かっていくことが大切だと考えていることを理解することができた。

② 生活作文

「ぼくの宝物」という題材の作文に関しても、上述の読書感想文と同じ形態で指導する。

その結果、彼は、「大人になったら祖国のために力を尽くしたい。そのために、今は一生懸命に勉強することが大切である。勉強している自分を励ましてくれている電気スタンドが宝物である。」と考えていることが理解できた。

これらの作文が完成したあとで、かれはとても充実したような嬉しそうな顔をしていたことを付記したい。他の教師やクラスの仲間にも「これが、ぼくの作文だよ。」と自慢げに見せたりしていた。自分の内面の考えを日本語で表現できた喜びであろう。

3 日本文化理解を通して

(1) 日本文化理解の必要性

長期にわたり外国で生活する者にとって、その国の文化や伝統を知ることが、言語の理解と並行して重要なことではないだろうか。彼の場合、すでに友達と日本語で簡単な日常会話ができるまでになっており、その会話の中で、「正月は～」など日本の伝統的な風俗、習慣を当然知っているものと前提した上でのももあり、なにか話がうまくかみ合わない面が生じてきた。このギャップを埋めるためには、日本の伝統、文化を理解することが必要であり、日本人と共通の文化基盤を持つことにより、コミュニケーションもより円滑にいくのではないかと考え、日本の古典や文化も学習することにした。

(2) 古典学習を通して

上述のような考えから、まずは、日本人であれば誰もが知っている「浦島太郎」や「一寸法師」の紹介から始めた。中学生にとっては稚拙な話であるようにも思われたが、絵本に描かれている昔の日本の風俗など興味深げであった。次に、「かぐや姫」の話から「竹取物語」へと、日本の古典の学習が進んでいった。さらに、平安時代の風俗、文学へと本人の興味を誘い、学習が進む運びとなった。多少、難しいかと思っただ、国語の教科書に掲載されている「枕草子」の原文を扱ったところ、以下の点で学習

に有効であった。

① 現代語訳を考え書いていくことは、文章を綴る学習として有効である。

② 特に古典では、助動詞、助詞をはじめ言葉の一部が省略されている表現が多いので、省略部分の語を考えることが言語学習に有益である。

③ 現代語に直すと非常にわかりやすい文章であり、そこに書かれている当時の日本人の感性について理解を深めることができる。

(3) 短歌、俳句の学習を通して

さらに、日本独自の文学を知りたいという彼の希望から短歌や俳句にもふれてみた。当初理解した内容を文字(日本語)で表現させようと試みたが、その趣のある深い世界まで書かせようとする、どうしても教師の考えた文章をただ書き取るようになってしまい、本人が心の中で感じ、考えた世界を表現しているとはやや違い、彼もなにか不満そうであった。そこで、文字による表現の代わりに絵による表現を採用した。短歌、俳句の世界を絵で表現することで本人も思いのままに表現でき、また教師の方でも彼が自分なりに感じた世界を理解することができた。

(4) 自分が体験した日本文化を通して

日本で生活している中でとてもユニークだったものを尋ねると、正月の風習であるという答が返ってきた。地域での餅つきに参加した感想など、おりにふれて文章化することにより、またその過程を通して文章表現力を育て、また日本文化に対する興味・関心が深まっていくことを願っている。

4 学校生活の中で

(1) 学級の活動

学活の時間などに中国での生活を発表したり、また中国の歌を彼がクラスメイトに教え、それを林間学園のスタンプで学級として発表するなど、学級としても彼の活躍できる場を設定している。他の生徒達にとっても彼の存在は、国際理解、交流の上で意義あることであろう。

(2) 中国人留学生との交流

本校には、千葉大学の留学生が国際交流を目的として定期的に訪問している。その中で中国人留学生が訪問したときは、必ず彼に合わせ二人で会話をさせている。やはり、中国語で会話ができるこの時がいちばん楽しいと本人も言っている。中国人留学生の来日の目的は農業や工業などの専門技術を日本で学び、それを祖国に持ち帰り役立てることであり、そのために今、外国(日本)で頑張っている姿勢が双方に共通しているためであろう。

5 成果と課題

日本語担当教師のみでなく、学級担任、各教科担任の協力、連携により、今日に至っていることはいうまでもないことである。互いの情報交換は密に行っている。また、休み時間や放課後の様子などに関しても、彼と仲のよい生徒から何となく話を仕入れたりして(「～のことがよくわからないみたいだよ。」とか、生徒達もいろいろと教えてくれる。)その後の指導に役立っている。

そして、彼の両親ともに学校に対しては協力的であり、保護者会などにも必ず参加している。特に母親は、まだ不自由な日本語にもかかわらず、PTAの要請に応じ、PTA料理教室の講師として中国の

1 プロフィール

中学3年女子
 1993年2月2日の朝、U子は両親と本校の校門をくぐり校長室を訪れた。スリランカからの編入学である。本校では久しぶりの外国人子女である。委員会からの連絡では、父親は日本語堪能、本人も片言ならできるといったことがあったが、実際には父親が日常会話ができる程度、U子は「今日は」と「ありがとう」しか知らなかった。
 父親は英語もできるので（これはかなり上手）、日本の中学校の生活や持ちものなどを日本語と英語をごちゃ混ぜにして説明し、翌日から登校することを約束する。
 学齢は中学2年だが1学年に編入させる。
 両親：父 半年前に来日。金属部品工場で外国人労働者の技術指導にあたる。
 母 子供と一緒に来日。日本語、英語全く話せない。
 U子（仮名）：3人の姉弟の一番上。現地校では7年生。小学校中学校併設の女子校に在学していた。日常会話はシンハリ語。英語力は日本の高1程度（英語教師による）

2 経過

取り出し授業については校内の帰国子女教育委員会で話し合い、国語、数学、理科、社会、道徳、学級活動の計16時間でスタート。とにかく日本語の日常会話を習得させることを目標に始めた。指導者は帰国子女委員会のメンバー（5人）を中心に、所属クラスの時間割にそって、空き時間の先生にお願いする。

教材は、市帰国子女委員会発行の“にほんごワークシート”を使う。U子専用の指導記録ノートを作り、毎時間の記録をとることにした。（時間割は資料1）

指導記録ノートより

H5. 2. 3

朝、両親と3人で登校。

クラスで歓迎会を行う。本人の自己紹介。Y君の歓迎の言葉（英語で）

- | | | | |
|---|----|-------|--|
| 1 | 数学 | 図形 | 本人既習済みとのこと
板書をノートに写す。 |
| 2 | 体育 | 創作ダンス | まわりの子が創作ダンスについて説明。
わからなくてもみようみまねと一緒に踊る。 |
| 3 | 社会 | 取り出し | T先生と時間割（Time Table）を作る。
「お祈りの時間」はないのかと質問する。 |
| 4 | 理科 | | 板書や先生の説明をY君が英語で説明。 |

12:40 両親の車に乗る。父親より来週から送り迎えができないので、しばらく近くの友だちをつけてほしいとの依頼。（スリランカの学校では必ず誰かが送り迎えをする）クラスの女子を中心によく面倒をみる。言語はもちろん、風俗、習慣が違うので、本人は緊張しているのだろうが、「今日は楽しかった?」「疲れた?」の問いに、「とても楽しかった」「疲れていないよ」という返事が笑顔でかえってきたのでひと安心！（原文のまま）

このようにしてスタートしたU子の学校生活であったが、問題は山積みであった。

『住居はどこ?』（1年3学期）

一週間後、少しずつクラスにも慣れてきた頃、1、2日欠席が続いたので父親の勤務先に電話で連絡をとる。風邪をひいているとのこと。いきなり常夏の国からやってきて、日本の冬はこたえるのだろうと考えていた。

父親の依頼で送り迎えをしていた女子生徒がこう話した。

「先生。U子ちゃんの家はどこにあるんですか。いつも家の近くに來ると、ここまでと言って別れるんです。朝も公園の近くで待ち合わせして、家を教えてくれないんです。でも約束した時間に來ないから私達が遅刻しそうになるんです。」

翌日、登校したU子に事情を聞いた。

「先生、U子さんの家に行ってお父さん、お母さんと話をしたいな。」

U子は首を振って、ダメだと言う。詳しく話を聞いていくうちに、届けた住所に住居はないこと。（父親は工場内にアパートがあるといていた）今は、住居が決まらず、先に日本にきた同郷のスリランカ人のアパートに家族で間借りしているなどわかった。（それもS市といえかなり遠い）

さっそく、父親の勤務先の会社の社長さんに連絡をとった。

なかなか外国人には貸してくれないことはわかったが、学区外通学とわかっていながら通わせるのは問題もあり、委員会に連絡をとる。

結局、住居が決まったのは春休みだった。（これもかなり遠距離のI郡）

しかし、U子はかなりのスピードで日本語をおぼえていき、2年生に進級するときには、平仮名、片仮名、簡単な漢字の読み書きはできるようになっていた。日常会話もやさしい言葉を選んで話せば、ほとんど支障がなくなったことと、本人の希望を入れて、新年度からは、取り出し授業を少しずつ減らしていくことにした。

2年に進級。5月に家庭訪問をする。U子の話の他に、スリランカの情勢や日本とスリランカの教育について話をする。両親はU子の日本語習得の程度がどの位かとても気になる様子。また、国では情勢が悪くなかなか仕事が出来ないこと、できればずっと日本に住みたいこと、家と車を売って就労ビザを買ってきたことなどを話した。

2学期からは全授業をクラスで受けるようにする。帰国子女で英語に堪能な生徒を補助に授業を展開していった。文化祭では全校生徒の前でスピーチも経験。（資料II）

ところが、3学期に入り欠席が目立つようになる。連絡はいつも風邪。それでも沈みがちのU子に、機会をみつけては何度も聞いた。「どうしたの？」

『先生、助けて！』（2年3学期）

何度聞いても要領を得ないU子に、父親へ来校を乞う。父親の話では、「このまま日本の教育を受けさせても、国に帰ったとき中途半端になると思う。実は、S県にいる親戚のところでスリランカの教育をしばらく受けさせたいがどうだろうか」というものだった。そして、それきりU子は登校しなかった。

しばらくして、U子と仲のよかったクラスメートの一人が、「先生、夕べU子から電話があったの。『私、学校に行きたい』っていうんです。それで、U子、今何しているのって聞いたら、『働かされてる』っていうんです。U子何かあったんですか。」

びっくりして、事の真偽は別として、弟の通う小学校の先生に連絡を取ると、同じ理由で休んでいるとのこと。早速父親に連絡する。もちろん、父親は否定。翌日2週間ぶりにU子は登校する。

「先生、お父さんに言わないで。わかるとお父さんにぶたれるの。でも、私勉強したい。私まだ働きたくない。先生、助けて。」

U子の話だと、家の近くのおもちゃ工場で働かされたこと。4月になったら、弟も一緒にずっと働かされそうなこと。他にも外国人の子供がいたことなどを話した。

法律に触れることでもあるので、小学校と連携をとりながら動静を見守ったが、その後、U子は再び登校し始めた。

色々な問題を含みながらU子は3年生に進級した。2年生から始めた合唱部の活動も軌道に乗り各コンクールにも参加した。学習も充分とはいかないが、授業中一生懸命ノートを執ったり発表したりする姿がみられた。弟も中学に入学し、入学式には両親そろって出席し2年の3学期のことは何もなかったように月日は流れていった。

そして3年生になりよいよ卒業後の進路を真剣に考える時期を迎えた。1学期に1回目の進路希望調査を実施したが、U子も進学を希望した。将来は看護婦になりたいという。国に帰って困っている人をたくさん助けたいと話した。

秋になり三者面談の時期を迎える。

『U子の選択』（3年2学期）

1学期末の親子面談では、両親ともU子の進学に賛成であった。2学期になり、学級活動の時間に進路のビデオを観てクラスで話し合う機会があった。そのとき書いたU子の感想が気になり面談をした。（資料Ⅲ）

U子の話では、自分は進学したいが、両親は反対しているということだった。理由は、第一にお金がたくさんかかること。第二に日本の高校生は変なのが多くてU子もそれに染まってしまうかということだった。だから、先生も親を説得してくれという。

1回目の三者面談では、両親は中学校を卒業したら働かせたい意向であった。父親は早くお金を

貯めて国へ帰りたいと話した。

学校としては、親や生徒に卒業後はあしなさい、こうしなさいとは言えないと前置きした上で、親は子供の考えをよく聞き、子供も家庭の事情は理解すべきことを話した。そして、高校入学時にかかる費用や一月に必要なお金、あるいは働きながら通う学校のこと、更には就労ビザのない子供が就職できるかといったことまで話をした。

それから、U子の進学への戦いが始まった。自分の行けそうな高校調べ、親の説得。そして、ついに2回目の三者面談では、進学をさせるという両親の了解をとりつけたのである。

現在、U子は、県立高校の推薦試験を目指して勉強中である。推薦試験がダメだったら一般試験でと、勉強に余念がない。

結果はどうあれU子は今、異国の地で自分の進むべき道を自分で切り開こうとしている。

3 成果と課題

本校は、帰国子女の数は非常に多く、帰国子女教育や条件整備には長く力を入れてきた。また、異文化理解のための授業も研究が進められ成果を挙げている。

しかしながら、外国人子女の受け入れと教育ということになると、あまりに条件の不備が目立つ。生徒にとってはU子と生活した2年余はとても価値あるものであったろうが、学校が一人の外国人子女のために割く時間と労力は大変なものである。特に学校と保護者が連携を密にしていかなければならないが、言葉の障害や習慣の違いから学校の意図することがうまく伝わらないことも多い。また、来日の事情も様々であり、時には法的手続きをとらずに滞在を続けている場合もある。学校がどこまでその問題に関わっていけるであろうか。何れにしても、もっと保護者との関係を密にすることが肝要であると考えさせられた。

これから益々、長期化、多様化、広域化するであろう外国人子女を受け入れるためには、学校の受け入れ態勢の充実とネットワークの拡大が更に必要となろう。

(資料1)

取り出し授業時間割

平成5年2月9日(火)

2月3日(水)編入学した、U子の取り出し授業を下記のような時間割で実施したいと思います。数多くの先生方にご協力いただきます。よろしくお願ひします。

TIMETABLE

	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SATURDAY
1	MUSIC 音	ART 美	JAPANESE 国 F	JAPANESE 国 I	ENGLISH 英	JAPANESE 国 K
2	ENGLISH 英	ART 美	PHYSICAL 体 EDUCATION	JAPANESE 国 J	PHYSICAL 体 EDUCATION	CALLIGRAPHY 書
3	JAPANESE 国 A	JAPANESE 国 D	JAPANESE 国 G	JAPANESE 国 K	JAPANESE 国 L	JAPANESE 国 M
4	JAPANESE 国 B	ENGLISH 英	JAPANESE 国 H	ENGLISH 英	JAPANESE 国 G	
5	JAPANESE 国 C	JAPANESE 国 E	MUSIC 音	JAPANESE 国 C	HOME MAKING 家	
6		PHYSICAL 体 EDUCATION			HOME MAKING 家	

- ・ 専用の指導記録ノートを作り、毎時間の指導記録をとる。
- ・ 帰国子女委員会作成の日本語初期指導カリキュラムにしたがい、平仮名、片仮名、簡単な日常会話修得のための指導をすすめていく。
- ・ 国、社、数、理の4教科、及び道徳、学級活動の時間取り出し授業を行う。
- ・ 教材は 市帰国子女委員会発行の“にはんごワークシート”をつかう。

(資料2)

1. 今日のビデオを観て、感じること、考えさせられたこと
やっぱり 自分の いけん と おやの いけんが" おおじ"
おに おおじ" いって思ふ 自分は やりこ" じや
どこに 入れば いいかを おおじに つたえて いっしょにいけんか
やる 気もち を もつ。 彼は おおじに みせて へんじを
OK しければ" じやない。 なのよ" は いっしょにいけんか
い へんじを を に みせて か、 おおじ 1人きりに
おつた と思ふ。 自分たちの こが けり じやない
子供の - いけんも かわか" なければ" じやない。 75%
は 子供の気もちで 25% け おおじの 気もちだと思ふ。
へんじを するのは おおじ" は おおじさん。 だが、 自分
の 道を 自分で つくせる ように しに けりか" しい
と思ふ。 けれど、 なのよ" と 同じおおじ さんだりに つたえる

6年度外国人子女教育指導資料作成委員会委員

- 佐藤 郡 衛 東京学芸大学海外子女教育センター助教授
- 鈴木 清 彦 習志野市立大久保小学校教諭
- 田中 のり子 市原市立八幡中学校教諭
- 本田 成人 市川市立宮田小学校教諭
- 飯伏 俊 昭 船橋市立葛飾中学校教諭
- 田中 一 美 松戸市立古ヶ崎中学校教諭
- 安達 範 子 柏市立松葉第一小学校教諭
- 石上 綾 子 成田市立中台小学校教諭
- 七五三野 正子 千葉市立真砂第四小学校教諭

なお、教育計画課では主として次の者が本指導資料の編集・作成に当たった。

- 小林 哲 郎 県教育庁学校教育部教育計画課主査
- 北田 昌 史 県教育庁学校教育部教育計画課副主査
- 藤野 忠 士 県教育庁学校教育部教育計画課主任主事